



Oil-painting work -18

【身動きもせずに】100号油絵

●イースター島の巨石像の中で、一番古いとされている顔、形の異なる唯一発見された坐っている像です。
南米ティワナコでも似た像が発見されています。
しかしながら、類似点はあるものの、
この島の彫刻物は全てが独自の
創造性を持つ優れた作品であることには違いありません。
不思議な事に、この像はラノ・ララクの山裾を掘り起こして
いるときに発見されたのです。何の為に隠しておいたのか謎なのです。
わからないだらけの世界が地球上にあることが
素晴らしいではありませんか。



Oil-painting work -19

【たくましい智恵】50号油絵

●現在は、このようにコンクリート壁で囲まれた住まいが増え、島には「ハンガ・ロア」をはじめとした、素敵なホテルが数軒できてきました。古代の人々は、木組みとトトラ葺の茎を乾燥させて屋根にした住居と洞窟を利用した岩屋住まいでした。この岩屋からは神秘的な彫刻物や、ロコハウ・ロンゴ・ロンゴ文字が発見されています。破損したガラスを、大切に有効利用する村の人々に物があふれていると錯覚し、使い捨てに麻痺しかけている自分が恥ずかしくなった。このガラス窓には、生きる智恵の美しさがあった。



Oil-painting work -20

【モアイの目に隠されたものは】50号油絵

●ラノ・ララクの山裾だけでも100体をこえるモアイ像が屹立している。ここから浅瀬の海岸まで運ばれ、侵略者を寄せつけない威風堂々とした後ろ姿で君臨したのである。考古学者の間で、モアイの目の存在で議論が交わされたが、アナケナの美しい海岸で発見されたことで終止符が打たれた。この目の制作の精巧さにまた、熱い議論が巻き起こっているのだ！40センチもあるモアイの目は、イースター島に古くから伝わるもう一つの名称「マタヒ・テ・ランギ」天を見上げる目というロマンチックな名もある。



Oil-painting work -21

【遙か】50号油絵

- ラノ・ララクで誕生したモアイは、自分の位置を確認し、一人で山を降り、歩きだしたといわれています。とても、学者の仮説による運搬方法で運んだとは考えられない。別の力で動かしたとしか考えようがないのです。



Oil-painting work -22

【聞こえる聞こえる】100号油絵

●島の東よりに位置するラノ・ララクの山の斜面では、毎日神々の申し子のような彫刻家たちの激しい作業が繰返されていたそうです。
しかし、突然神隠しにあったかのごとく作業は中断され、二度と優れた芸術家集団に出会う機会を失ったのです。
モアイ像の背景の海は、実際の風景では逆の位置にありますが、360度、海に囲まれた島のイメージから、山裾に静かにたたずむモアイの憂いを演出させるために、あえて海を背にした。



Oil-painting work -23

【静寂】50号油絵

● 洞の直径2メートルを超える、異様なまでの執念と破壊力。
そのエネルギーに脱帽するしかありません。
石切り場が出た小石を詰め込みながら、
モアイ像を立たせたといわれていますが、
別の高度のテクノロジーが存在したとしか考えられないのです。
夏も終わりに近づき、初秋の風が砕かれたモアイの背を
悲しげな音をさせながら吹き抜けていくように聞こえたのです。



Oil-painting work -24

【午前5時】50号油絵

●モアイは、島民が深い眠りについたころ行動を開始、島民が目覚める前に、何もなかったかのようにそれぞれの場所に戻り立っていたという楽しい伝説があります。この島に残された数々の知恵、工夫、技術を見せつけられると、まんざら、作り話でもないような気がしてきます。静まりかえったラノ・ララクに朝日があたりはじめるとまるで、時をさかのぼり、かつてのモアイ造りの1日が始まるような気がしてくるのです。



Oil-painting work -25

【熱い風】100号油絵

●背景のポイケと呼ばれる海拔250メートルほどの山は、かつて短耳族と長耳族の存亡を賭けた争いが繰り広げられたところです。その激しい戦いを物語る焼跡は、いまも残されています。頂上だけに茂る木々は、雨水だけで生きているのです。ひざを超える高さの草原が続き、登山途中の岩肌に、口をカーッと開いた鋭い形相の顔が刻まれています。



Oil-painting work -26

【眠っている間に】50号油絵

●ラノ・ララクの山裾には、
浅瀬の海岸へ運ぶまで一時的に立てられた
300体を超えるモアイ像が放置されています。
その中で、いま、まさに山裾の斜面に
顔面がつかんばかりに放置された
1体のモアイを見て、
おもわず、すみませんと叫んだ。
制作された斜面をスベリ降ろされた
モアイの中途半端な姿勢が
怒りを発しているようで圧倒されたのです。
どうぞ、眠りから覚めないで！
そ〜っとすり抜けよう。



Oil-painting work -27

【いつかきた道】50号油絵

●雨の日も風の日も、
巨大なモアイを浅瀬の海岸まで運んだ姿を思うと
たまらない気持ちにさせられるのです。
でも、夢中になれる時間は、
かかわったものだけにしか
味わえない喜びであったかもしれない。
むきだした火山岩に、たたきつける雨音が、
ひよわな私の心を励ましてくれる
応援歌に聞こえてきたのです。



Oil-painting work -28

【ベビーモアイの春】50号油絵

●ラノ・ララクの山裾に放置されたモアイ像の中に
顔やスタイルがあきらかに異なる
可愛らしいモアイ像を見つけた。
私には、抱きかかえてくれる母親を待つ
赤ちゃんモアイに見えたのです。
特徴ある突き出たアゴや首も見られないことから、
生まれたての”ベビーモアイ”と呼んでみた。



Oil-painting work -29

【倒された瞬間】50号油絵

●ラノ・ララクの山裾から3キロぐらいのところにある
ハンガ・テテンガまで運ばれ、
そして、立てられた8体のモアイ像があります。
全てうつ伏せに倒されている姿が息を呑む。
次々に倒され散乱する赤い岩、灰色の胴体。
ラノ・ララクで生まれ、運ばれ、
そして立てるために費やした時間が虚しい、と考えるのは・・・。
背景の青く澄んだ空と白い波しぶきが、
やけに感傷的にさせるのです。



Oil-painting work -30

【呼び声】50号油絵

● 神聖なモアイ誕生の地にあるモアイ像は、
争いに傷つくことなく残されています。
肩から下はさらに10メートルも地中に埋められているのです。
巨大なモアイ群を見上げながら、
すり抜ける感覚は、
地球以外の惑星に舞い降りたような気分させられます。



Oil-painting work -31

【巨石人の街】50号油絵

●古代の芸術家たちは、
朝日とともに日の沈むまで、
ひたすら石を刻み、
数々のモアイを製作していたのです。
活気に満ちた歌声と、作業風景は、
”巨石人の島”として青い海原の中に君臨したのです。
山裾に見える無数のモアイが、
不思議な世界へタイムトリップさせてくれるのです。



Oil-painting work -32

【神々からのおくりもの】50号油絵

●モアイ像の謎の一つとされていた巨大な目が発見された
アナケナの海岸を北とすれば
真南に位置する地点に8つのモアイが
うつ伏せに倒されている場所がある。
神々の使者は、東西南北を指す地点に、
モアイ像を立て
それぞれの時と方向を教えようとしていたのではないのでしょうか。
巨石像がうつ伏せに倒された傍で、
2匹の馬がゆっくりとした時間を
楽しんでいる姿が心をなごませてくれる



Oil-painting work -33

【気がついたときは強い雨】50号油絵

●民俗争いの地、ポイケからラノ・ララクへと続く道。
さきほどまでの情け容赦なく照りつけていた太陽が、
アッという間に厚い雲に覆われ、
落雷が大地をゆする。
もう間に合わない、ただ啞然として濡れるだけ。
視界をさえぎるものは何もない。
雨が、主役になれる風景だから、
濡れても、気分は最高。



Oil-painting work -34

【巨石人像”モアイ”が眠る山】50号油絵

放牧されている馬が、うれしそうに駆け抜ける。
追いかけられるものも、追うものもない。
さまざまな生き物が自由気ままにうごめいている。
時間という制約に縛られることもなく、
生きていることも自然体。
あとき、ボーッとしながら眺めた風景を、
描いた風景の中で、
いまでも毎日タイムトリップできます。